

発行

京都教育大学同窓会

発行責任者

会長 大越 房数

京都教育大学 同窓会だより



事務局

〒612-8522

京都市伏見区深草藤森町1
京都教育大学内

TEL 075-644-8353
FAX

メールアドレス
dosokai@kyokyo-u.ac.jp



いよいよ大学創基一五〇年を迎えました

京都教育大学同窓会副会長 阪田 忠司



私達の京

都教育大学

は本年度創
基一五〇周年を迎えました。心よ
りお慶び申し上げます。

本学は明治九年京都府師範学校として創立されました。その後、大正一五年創立の京都府実業補習学校教員養成所を前身とする京都青年師範学校と包括され、昭和二四年に国立学校設置法により、京都学芸大学として設置されました。さらに、昭和四十一年に京都教育大学と改称し、平成一六年に現在の国立大学法人京都教育大学となり、京都府師範学校の創立から本年（令和八年）で創基一五〇周年を迎えることとなりました。誠にめでとございます。

同窓会といたしましては、来る七月一二日（日）にホテルオークラ京都にて創基一五〇周年記念同窓会総会を開催いたします。ぜひとも会員の皆様方に多数結集していただきまして、創基一五〇周年を大いに盛り上げていただきたい

と存じます。

本学は教育関係はもとより様々な分野で活躍される卒業生を全国に輩出しています。その足跡に感謝と感謝の念を覚えつつ、同窓会は会員の皆様への情報提供等や在学生への支援に、より寄与できる存在であり続けたいと思っています。入学時入会会員の一般会員への移行が今年から始まることもあり、創基一五〇周年を機に同窓会組織の一層の充実に向け、会員の皆様の更なるお力添えを切に願っています。

今号の内容

- ① 副会長挨拶
- ② 教育大の地元を歩く
- ③ 学び舎／大学の今
- ④ 創基一五〇周年記念事業
- ⑤ キャンパスライフ
- ⑥ 創る
- ⑦ アートフォーラムの活動
- ⑧ 頑張ってます
- ⑨ 紫郊体育会の活動
- ⑩ 旧友交歓
- ⑪ 本本部だより
- ⑫ 行事・編集後記
- ⑬
- ⑭
- ⑮
- ⑯

学び舎

大学の今

「京都教育大学附属

特別支援教育臨床実践センター」から

「学びサポートセンター」まで

京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構

総合教育臨床センター長(教授) 相澤 雅文



京都教育大学
附属特別支援教
育臨床実践セン
ターは、平成一
九(二〇〇七)
年七月に発足し
ました。二〇〇

都府・京都市教育委員会との協働のもと、特別支援教育の充実と発展を担う中核機関として創設されました。地域における「気になる」子ども等を対象とした発達相談、現職教員を対象とした研修による地域貢献、年間三回の特別支援教育セミナーの開催、臨床指導を通じた学生の専門的技術の向上などの取組を開始しました。加えて、小集団活動の実施、通常の学級に在籍する発達上の課題をもつ児童生徒に対する教育評価および指導方法の開発に取り組んできました。

令和元(二〇一九)年四月には、大学の組織改編により、教育臨床心理実践センターと特別支援教育臨床実践センターが発展的に統合され、「総合教育臨床センター(教育臨床心理実践拠点・特別支援教育臨床実践拠点)」が設置されました。これにより、特別支援教育と教育臨床心理の両分野を横断的に推進し、より一層の社会貢献を果たす体制が整えられました。

さらには令和四(二〇二二)年度には、「学びサポート室」が新設されました。本室は、発達障害等のある子どもへの横断的・縦断的、持続的支援体制の構築を目的とし、京都府・京都市教育委員会と連携しながら、学術的根拠に基づく専門的支援を実施しています。幼児児童生徒育成、地域連携、キャリア発達、知的ギフト教育支援など四部門を有し、教職キャリア研修プログラムの開発や、学生向け特別支援教育カリキュラムの整備、シンポジウム開催、まなサポートDB(データベース)などを通して知見の普及に努めています。また、インクルーシブ教育、不登校予防、心の健康観察、学校風土の改善、特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援など、時代的要請に応じたプロジェクトを展開し、教育現場と社会の課題解決に寄与しています。これら一連の取組を通して、本学は確かな理解と豊かな実践力を備えた教員養成を推進し、地域とともに特別支援教育の発展に貢献し続けています。

※所属は令和八年三月現在

七年は、我が国の教育制度において「特殊教育」から「特別支援教育」へと大きな転換が図られた年であり、「特別支援教育元年」とも位置づけられています。本学は、文部科学省の「専門職大学院等教育推進プログラム」として、特別支援教育G P (Good Practice)「KYOの特別支援教育トライアング

ルプランナー特別支援教育臨床実践センター・教育委員会・学校による教員養成」の採択を受け、京

都府・京都市教育委員会との協働のもと、特別支援教育の充実と発展を担う中核機関として創設されました。地域における「気になる」子ども等を対象とした発達相談、現職教員を対象とした研修による地域貢献、年間三回の特別支援教育セミナーの開催、臨床指導を通じた学生の専門的技術の向上などの取組を開始しました。加えて、小集団活動の実施、通常の学級に在籍する発達上の課題をもつ児童生徒に対する教育評価および指導方法の開発に取り組んできました。

さらには令和四(二〇二二)年度には、「学びサポート室」が新設されました。本室は、発達障害等のある子どもへの横断的・縦断的、持続的支援体制の構築を目的とし、京都府・京都市教育委員会と連携しながら、学術的根拠に基づく専門的支援を実施しています。幼児児童生徒育成、地域連携、キャリア発達、知的ギフト教育支援など四部門を有し、教職キャリア研修プログラムの開発や、学生向け特別支援教育カリキュラムの整備、シンポジウム開催、まなサポートDB(データベース)などを通して知見の普及に努めています。また、インクルーシブ教育、不登校予防、心の健康観察、学校風土の改善、特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援など、時代的要請に応じたプロジェクトを展開し、教育現場と社会の課題解決に寄与しています。これら一連の取組を通して、本学は確かな理解と豊かな実践力を備えた教員養成を推進し、地域とともに特別支援教育の発展に貢献し続けています。



キャンパスライフ



学生会員

「教育の可能性を信じ、駆け抜けた四年間」

教育学専攻四回生 秋田 真利亜



京都教育大学での四年間は、私にとって「教育とは何か」を本気で問いつけた挑戦の日々でした。

一年次から立ち上げた学生団体では、鳥取市議会議員の柳様や教育者の芦田様をお招きし、対話の場を実現しました。お二方との真剣な議論は、学校教育の可能性と責任の重さを強く胸に刻む転機となりました。

また、留学生との交流を通して世界中に志ある友人ができ、多様な価値観に触れる中で、自分の世界が一気に広がりました。

教育実習では附属校の先生方から真摯なご指導をいただき、「子どもの可能性を最大限に引き出す教育を実現したい」という決意が揺るぎないものとなりました。卒業論文では、

過酷な一年目を乗り越えた教員の歩みを辿り、未来の教育を担う同志や自分自身の羅針盤となる一冊を目指して書き上げました。

振り返れば、数多くの挑戦を力強く支えてくださった先生方や職員の皆様、そして本気でぶつかり、高めた仲間の存在があります。この大学で得た学びと出会いへの感謝を胸に、これからも子どもたちの未来に真正面から向き合い続けます。

共に歩んだ仲間たち、それぞれの場所でも最高に輝く未来を切り拓いていきましょう！



※学年は令和八年三月現在

同窓会活動の活発化に向けてご協力を

今年は京都教育大学創基150周年の年です。同窓会では会員相互の親睦を図る取組や学生会員の方々への奨学金支給などの活動に引き続き取り組むとともに、会員の皆様のご支援を得て、記念の年の活動としてより活発化させていきたいと考えています。そのためには、次のような点で会員の皆様のご協力をお願いしたいと思います。なお、同窓会の活動内容や入会届、住所変更届などについては、同窓会・事務局HPでご確認ください。

○会員数増へのご協力を：各学科同窓会や同窓生の方々が組織されている体育会・サークルのOB・OG会等での入会促進の声かけをお願いするとともに、日常的な「ワン・ツー運動（一人の会員が未加入の二人以上の卒業生に声をかけ、会員を増やしていく運動）」を行ってください。

○住所変更のお届けを：各支部や同窓会事務局から送付している「同窓会だより」が宛先不明で戻ってくる場合があります。確実にお届けできるよう、住所等を変更された場合は速やかに事務局へ届けてください。



同窓会事務局



同窓会HP

支援の現場で学び続ける



令和5年
教育学部発達障害教育専攻卒

山崎 美優

教員として教育現場に立ち、まもなく丸三年が経とうとしています。学生時代に支援員や学生ボランティアとして見てきた景色と、教員として立つ現場とでは、見えるもの、感じる重みが大きく異なることを日々実感しています。

総合支援学校は、何よりも人との関わりが大切な場所です。私たちが普段何気なく行っていることが、障害のある子どもたちにとっては大きな困難を伴うことも少なくありません。その一つひとつを噛み砕き、どこに困りがあるのかを考えながら関わる中で、子どもたちの小さな変化が、大きな成長につながっていることを学びました。学校での学びが家庭での生活に結びつくと保護者の方から聞いた時、またその喜びを共に分かち合えた時に、この仕事のやりがいを感じます。忙しい毎日の中でも、子どもたち一人ひとりの成長や笑顔に出会えること、同僚の先生方と悩みを共有しながら教材を考え、試行錯誤を重ねる時間は、とても有意義で、教員としての原動力になっています。思うようにいかないことや、「これが本当にその子にとっての最善なのか」と自問する場面も少なくありません。支援に唯一の正解がないからこそ、立ち止まり、考え、学び続ける姿勢が大切だと感じています。

これからも現場での実践を積み重ねながら、専門性や知識を磨き続け、子どもたち一人ひとりと真摯に向き合う教員でありたいと思います。

(京都市立北総合支援学校勤務)

感謝



令和4年
教育学部幼児教育専攻卒

中村 美友

卒業して4年が経ちました。非常勤、常勤、正規、四つの学校で担任の仕事を経験させていただきました。春は毎年、心配と緊張で胸がいっぱいになり、以前の学級が懐かしくなります。冬になると、その学級で過ごす時間が当たり前になってしまいます。どの年も悩み、教員として成長しているのか不安になります。

そんな中で、私はこれまで校長先生や教頭先生、同学年の先生、年の近い先生、多くの方々に支えていただきました。相談したときには、良い点も改善点も丁寧に伝えてくださったり、生徒指導で躓いたときには、一緒に解決までの方法を考えてくださったり、励ましてくださったり、数えきれないほどお世話になりました。校内研究では、普段知ることのできない先生方の実践を学ぶことができ、憧れの存在ができました。

子どもたちにも支えられています。日記の宿題が大好きで、卒業後も日記を送ってくれる子、声を出すことが苦手な中で「今までありがとう。」と言ってくれた子、「自分なんて」が口癖だったのに「先生が褒めてくれて少し自分が好きになった。」と手紙で教えてくれた子。辛いとき、子どもたちのおかげで踏ん張ることができました。

未熟だからこそ、支えてもらっている方々への感謝と尊敬を忘れず、一緒にいられることが当たり前ではないからこそ、子どもたちとの日々をもっと大事に、一人ひとりが笑顔で希望に満ちて過ごすことができるよう、精一杯頑張りたいです。

(京都市立室町小学校勤務)

※勤務校は令和8年3月現在

頑
張
っ
て
ま
す

本部だより

第二六回写真展 第三回写真展スマホの部

令和七年度の写真展は、藤陵祭期間中の一月七日(金)から一月九日(日)まで、工事の影響で開催期間を一日縮めて、F26講義室で開催いたしました。

今年度の出展者・出展数は、額装の部が一六名三二点、スマホの部が八名二〇点と昨年度より若干少なかったのですが、力作も多く三日間の開催期間中のべ一〇五名の方々に鑑賞していただきました。鑑賞者の中には、家族連れで来ていただいた方もあり、お子様たちの素直な感想に、笑いあいながら和やかに鑑賞いただく場面もありました。

最終日の一月九日(日)の午後には、昨年一昨年に引き続き、講師の大西功先生(日本風景写真協会会員)においていただき、勉強会(写真講座)を実施しました。

はじめに、OB会として写真展を続けることの意義や、自分の写真とのかかわり、写真の在り方の変化などの話をされ、現代は、写真は自分の気持ちを映像表現するものに変容し、デジタルカメラ・スマホで生活写真を楽しんでほしいと話されました。続いて、出展作品について一点一点でいねいにご講評いただき、スマホの写真については、全体として肩の力が抜けていて良いことと、カメラでもスマホでも、面白いものに遭遇しそれを残したいという気持ちが大事と述べられました。

最後に今後の参考として、身近な写真の撮り方・楽しみ方として次の三点を話されました。

- ・身近な場所で撮影することが長く写真と付き合う秘訣である。いつも行く場所で、季節を変え時間を変え撮影すると良い。
- ・一枚の写真では表現できないようなことを組み写真で表現することもできる。
- ・コンピュータを使って写真を加工することを学ぶとさらに楽しみが広がる。

ということとで講評を締めくくられ、その後の質疑応答にも丁寧にお答えいただきました。紙面では、出展者の中からお二人の作品を大西先生の講評を添えてご紹介いたします。

第五九回囲碁大会

(囲碁道場)

囲碁大会は今年度も藤陵祭期間中の一月八日土曜日に、九時から一六時までA3講義室で実施しました。年々参加人数が少なくなっていますので、今年度は世話役の江草氏とご相談し、オセロも一緒に置かせてもらい、小学生以下の参加も期待しましたが、残念ながら三名の参加のみという結果でした。OBの皆様方の中にはきっと囲碁がお好きな方々もおられると思います。次年度の囲碁大会には是非ご友人とお誘いあわせのうえご参加いただけますようお願い申し上げます。

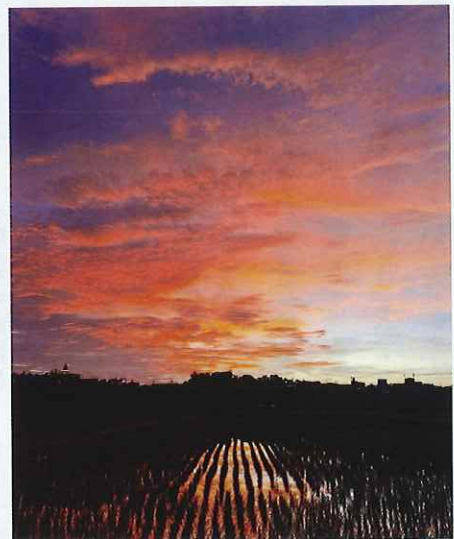


「陽光のアンブレラ」

谷口 究

【大西先生評】

カラフルな傘を广角気味のレンズでされたことで、遠くが小さく前がぱっと広がる映像になりました。カメラアングルも適切でうまく撮影されています。



「身近な田んぼの風景②朝焼け」

渡邊 聡

【大西先生評】

身近な場所にいろんな風景があるという点で良い参考になる作品です。露光のコントロールが非常にうまい作品です。

本部だより

〇いとも講演会〇 「英語の不思議発見」

英文学科教授 児玉 一宏 先生



【講師紹介】 1995年京都教育大学大学院教育学研究科修士課程を修了。同年に京都大学大学院人間・環境学研究科環境情報認知論講座博士前期課程に入学。2000年同大学院博士後期課程を修了。2004年人間・環境学の博士号 Doctor of Philosophy を取得。同年、京都教育大学英文学科助教として着任。現在、同大学英文学科教授として認知言語学などの言語理論と英語教育への応用について研究。2022年から同大学附属桃山小学校校長を併任。著書には「言語習得と用法基盤モデル」(研究社)「最新言語理論を英語教育に活用する」(開拓社)「認知言語学大事典」(朝倉書店)「はじめて学ぶ認知言語学」(ミネルヴァ書房)「最新小学校英語内容論入門」(研究社)など。

〇文法の定義

まず、古今和歌集の歌「夕づきよ 小倉の山に 鳴く鹿の 声のうち にや 秋はくるらむ」ほどの季節を詠んだ歌かを参加者に尋ねられた。「くる＝来る」と解釈すれば秋の始まりだが、助動詞「らむ」は動詞の終止形に接続するという文法を知っていれば「くる＝暮れる」であり、秋の終わりを詠んだ歌であることが分かる」と説明された。このように文法は意味を正確に捉えるための枠組みであり、英語学習にも生きるものである。文法とは表面形式(語順・形)と意味の対応関係を結ぶ仕組みであり、語順の寄与が大きい英語では語の並べ方で意味が変わる。(例..

John loved Mary / Mary loved John)

〇副詞のモダリティ機能と前置詞選択

受験英語では「副詞は無用だ」とも言われるが、副詞は話者の心的態度(モダリティ)を担うものであり、命令文前の「just」は「とにかく聞く・やる」に集中させる言葉である。(例: Just listen / Just do it)。副詞を含む表面上の語で無駄なものはなく、語の有無・位置が会話の生命力を左右している。

次に前置詞の話をされた。「ナイフで指を切った」などの事故的状况では「道具の前の前置詞with」と機械的に当てはめるのは十分ではない。その場面の意図性・事故性のイ

メージを考慮すべきである。ネイティブの評価では「with」は誤りではないが、より適切な前置詞があり、それが「on」である。「on」には接触の意味があり、意図的に指を切ったのではないことを「on」が表してくれる。他にも、「knock on the door」は礼儀正しいノックを表すが、「knock the door」とすると「ドアを破壊する」という意味になってしまふ。場面のイメージを重視し、「より良い前置詞」の再考を受講者に促された。

〇チョムスキー博士の普遍文法(UG)と哲学的源流

文法研究の第一人者であるチョムスキー博士の考えを紹介された。博士は普遍文法仮説をたて、人は生まれながらにして脳の中にUG(ユニバーサルグラマーの略)というものを持っており、その働きのおかげで母語を無意識のうちに習得し、短期間に、しかも高度なコミュニケーション能力を身につけることができる。これを博士は言語機能の初期状態と考えた。UGの解明が博士の研究の目標である。この考え方は古代ギリシャの万物の根源(アルケー)探求に起因している。神話的な世界(ミユトス)から理性的な世界(ロゴス)への転換を哲学者が考えたように言語の根源は何かを博士は考えたのである。

最後にピンカー博士の「Language is a window into human nature」

(言語というのは最終的には人間の本性を映し出す窓である)を紹介された。本性(ほんせい/ほんしょう)の語の読み分けを示し、言語活動の重要性を強調された。

日本の英語教育については教室内のインプットだけでは不足である。小学校英語の目的を興味喚起・基礎形成とし、中高に接続することが大切である。コミュニケーション活動と文法・構造学習のバランスが重要であるとの示唆を頂いた。そして、アインシュタインの「問い続けること」の名言を引用し、外国語学習を通じて日本語との共通点や日本語固有の部分を感じるなど言語一般と捉えて学ぶことが重要だと学習者へのメッセージも頂いた。

▽アンケートより(抜粋)

- ・古今和歌集に始まり、英語はもろろん哲学・数学と多岐に渡る内容で学ぶことの楽しさを実感した。
- ・UGについて初めて知る概念だった。
- ・英語を使って仕事をしているが、文法的重要性を再認識することができた。
- ・「言語学」への知識欲・興味の扉を開くことが叶った。
- ・「英語は苦手」と思いながら参加したが、英語だけでなく「言語の不思議」について考えることができ、興味深く楽しい講演会だった。

京都教育大学創基150周年記念 令和8年度定期総会・交流会のご案内

＜午前10時20分から受付開始～午前11時開会＞

と き 令和8年7月12日(日)
 ところ ホテルオークラ京都
 4階「暁雲の間」☎(075)211-5111
 交通 地下鉄東西線「市役所前駅」下車
 地下鉄連絡通路からホテルへ
 会 費 12,000円
 内 容 10時20分～ 受 付
 11時00分 総会開会
 12時30分～15時 交 流 会

☆総会参加の申込方法

- ・申込用紙を使用する場合は、必要事項を記入の上、事務局へ郵送またはファックスにてお送りください。
- ・下のQRコードから申し込まれる場合は、申込シートを読み込んで必要事項を記入し、送信(事務局へ)してください。

TEL・FAX (075) 644-8353
 Eメール
 dosokai@kyokyo-u.ac.jp



※申し込み締切は令和8年6月26日(金)までに、個人または同期会、学科(専攻)、ゼミ、クラブ、職域等グループでお申し込みください。

11時開会です

▶ 本年度 支部長会・幹事会 令和8年6月13日(土) 午後1時30分より ◀

第13回「いいとも講演会」

令和8年11月14日(土)

講師：京都教育大学体育学科 坂部 崇政 講師

第60回囲碁大会(囲碁道場)

令和8年11月14日(土)

場所：未定(大学内)



第27回写真展のご案内

開催日時：令和8年11月13日(金)～15日(日) 10時～16時
 京教大の学園祭(藤陵祭)の実施日に合わせて企画
 開催場所：大学内(詳細は未定)

—— 作品募集要項 ——

- ①作品出品資格 京教大関係者
- ②出品作品 一人2点以内(写題は自由) *撮影年月日と天地が判るように裏に表示
四つ切り(ワイド版にしないこと)またはA4版、額は当方で用意します。
- ③申し込みと問い合わせ先
・出展の申込は、10月23日(金)までに、申し込み葉書をお願いします。
・申込葉書が必要な方は、上記同窓会事務局までご連絡ください。
- ④作品の送付及び返却
・送付日 11月6日(金)までに、同窓会事務局に持参、郵送、宅配をお願いします。
・作品を直接事務局へ持参の場合は、あらかじめ事務局へお電話をください。
・返却日 11月15日(日) 写真展終了後お持ち帰りいただくか、後日宅配便にて返送します。



〈編集委員〉
 走井 徳彦 山本 早苗
 飯田 一輝 國重 初美
 谷 早苗 中東 朋子
 綿越 貴久

いよいよ大学創基一五〇周年の年を迎えました。今から一五〇年前の京都は、町衆が中心になり全国に先駆けて「番組小学校」を創設してから七年が経過した頃でした。東京遷都による街の衰退の危機に直面した時に今こそ必要なのは「教育」と考えていた人々にとって、教員養成への期待は大きかったに違いありません。私たちの母校は、長い歴史を紡ぎながら、全国そして世界各地、いろいろなところで活躍する人材を送り出してきました。

同窓会だよりでは、九六号から創基一五〇周年記念シリーズの記事を掲載してきました。「そんな時代があったのか」と驚かされ認識を深められる話や、懐かしい話に、それぞれの思い出もよみがえったのではないかと思います。本号でも、創部一〇〇周年を迎えた紫郊野球倶楽部からは、「継承」の大切さを伝える記事をいただきました。また、「キャンパスライフ」や「がんばってます」のコーナーは、若い世代の会員の方が快く執筆してくださいました。第三〇回全日本高校・大学生書道展で大賞を受賞された学生さんの作品も掲載しています。その他にも多くの皆様のご協力を得て発行できました。心から感謝いたします。

七月の総会には、創基一五〇周年を祝うと共に交流を深められるよう、世代を超えた多くの皆様のご参加を願っております。

編集後記